現代版「学問のすすめ」

第一生命経済研究所 特別顧問　松元 崇

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」で有名な福沢諭吉の「学問のすすめ」ほど誤解されている本も少ない。ご紹介したフレーズから、専ら、それまでの封建社会における士農工商という身分制度を批判し、近代的な市民社会を説いた本だと思われている。しかしながら、「学問のすすめ」は、そのタイトルの通り、本来、学問をすすめる本である。福沢は、このフレーズの後に、「されども今、広くこの人間世界を見渡すに、（中略）貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。その次第はなはだ明らかなり。（中略）ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」として、若い人に学問をすすめているのである。

そして、学問としては、まず実学を学び、それから哲学や歴史だとしていた。「実なき学問はまず次にし、もっぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。譬えば、（中略）手紙の文言、帳合いの仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等」である。それらは、戦後の我が国の学校教育で重視されなくなったことである。実学は、もっぱら企業が教えることになった。その流れの中で、大学は象牙の塔の中に閉じこもり、学生は実学以外の学問もまともに学ばなくなってしまった。私が内閣府にいたときに聞いた話だが、ヨーロッパでは、日本の大学は、まるで大人の幼稚園みたいだと酷評されているという。少子化の中で、定員を満たすために学力を後回しに学生をかき集め、トコロテン式に社会に送りだしているというのである。

そんな教育では、日本の若者は、今後、日本企業が活躍の場を世界に広げ、採用をグローバル化していく中で、次第に諸外国の若者に淘汰されていってしまうことになりかねない。少子化という状況があるので、国内企業への就職では淘汰されることは無かろうが、その場合にも、自分たちが作り出す付加価値が低いままでは低賃金になってしまう。となると、国際的な企業で働く若者たちとの間での格差社会が生まれてくることになる。

そうならないようにというので、ちょっと過激ではあるが、全国に781ある大学の大部分が職業訓練校になるべきだとの提言が出てきた（冨山和彦氏）。それによって、はじめて地域に必要な人材が育ち、地域産業の生産性向上、地域の活性化につながるというのである。東大などでも、学部と学生のレベルによっては、職業訓練に注力すべきだというのである。それに対しては、大学関係者からアカデミズムの否定だとの強い批判が出されている。しかしながら考えてみれば、冨山氏の主張は、福沢諭吉が唱えた「学問のすすめ」の原点に戻れと言っているだけともいえる。明治期の我が国の発展を支えた福沢の「学問のすすめ」の現代版ともいえる。大いに議論していったらよい問題だろう。

福沢諭吉の「学問のすすめ」にのっとった教育が行われていた戦前の状態を詠った俳句に、上田五千石の「立志伝、みな家を捨つ」というのがある。小学校を出れば、志の高い若者は、独りで故郷の家を後にし、生き馬の目を抜く大都会で立身出世を目指した。当時の小学校では、それに備えるだけの実学教育が行われていた。そして、そこから上の旧制高等学校レベルにおいては、デカルト、カント、ショーペンハウエルが必須の教養教育が行われていた。「実なき学問はまず次に」というのは、実なき教育の軽視ではない。デカンショ節が歌われ、アカデミズムも大事にされていたのである。